

帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ!

共産主義者同盟 (戦旗派)

戦旗

9月5日

5日、20日発行

360号

編集発行人 鹿島 昂

1部 50円

戦旗社

東京都新宿区番衆町10の8
コーポハビービルE1号
電話 03 (356) 2982
振替 東京26110

8.10政治集会の圧倒的貫徹にふまえ

天皇訪米絶対阻止総力戦へ!

8・28 シュレジンジャー来日阻止!
9・14-15日「韓」閣僚会談粉碎!

すべての同志諸君! 全国の労働者・学生
市民諸君!

七五年階級闘争後半の激闘の三カ月を全精力を傾注して死力をつくして闘い抜くわれわれの意志を、全アジア人民の前に明らかにし、アジア人民への血債にかけて、天皇訪米阻止決戦を担い切る決意を打ち固めることこそが、いよいよ要求されていることを確信しなければならぬ時が来ている。

七五年階級攻防の特徴は、ベトナム・インドシナ人民の革命戦争の勝利とアメリカ帝国主義の敗退、韓国民衆の反朴反日闘争の大爆発と朴カライ政権の崩壊の危機、アジアの被抑圧民族人民に連帯し、安保1日「韓」体制打倒の大道を前進する日本プロレタリアート人民と、体制的危機の中で朝鮮出兵によって延命せんとする日本帝国主義との激闘、これらの中にはつきりと現われている。

今や、帝国主義の体制的危機が朝鮮危機の中に集中的に露呈されていることは、誰の眼にも明らかである。そして、帝国主義者とプロレタリアート人民との対決の軸が、アジア最後の反革命生命線としてある、安保1日「韓」体制にあることが明らかとなっている。そして、八・二三木訪米に至る、連続的闘いの中で、三木戦争準備内閣の野望は、ますます暴露され、九・三〇天皇訪米の帝国主義的野望が、アジア人民にとって、ゆるすことのできないものとなってきた。

侵略反革命戦争へと突き進む日帝の前には、今や勝利せるインドシナ人民を先頭に、巨大なアジア人民の反撃と、日帝足下における、革命的左翼と被差別大衆の総決起に直面せざるを得ない。

七・一七海洋博粉砕闘争を突破口として、激闘の三カ月に突入したわれわれの任務は、八・一〇戦旗派政治集会における、みなぎる決意と覚悟を持って、八・二八シュレジンジャー来日から、九・一四-一五「韓」定期閣僚会談、九・三〇天皇訪米に至る、日帝の朝鮮出兵へ向けた野望を、粉みじんに打ち砕き、日帝を更なる敗北の道へと追撃することである。

七・一七-一八に続く
八・一二-二三木訪米阻止闘争の意義

八・二闘争の第一の意義は、三木訪米阻止闘争を主力闘争として闘い抜くことにより、日・米反革命「宗

主」による、朝鮮出兵策動に対して痛打をあげたということである。

六・二三宮沢訪「韓」という事前工作をふまえ、(すなわち 朴カライ政権への全面的テコ入れの約束)、強行された三木一フォード会談には、反革命「宗主」どもの共通の危機感が、そして共通の利害が吐露されている。「韓」国朴政権の崩壊をいかにいとめるのか、という共通の反革命的意図が、様々な「平和」的ポーズや言辞にもかかわらず暴露されている。

「インドシナ以降、日本国内で、危機感といわれないまでも、相当の不安感が生じた」(日本側討論資料)と、卒直にも日帝ブルジョアジーはベトナム革命戦争に対するショックと危機感を明らかにしている。そしてこの危機が、正しくも「韓」国朴政権の崩壊という日米両帝国主義にとっては体制的危機に直結する、という認識にとどまらず、これに対して、安保1日「韓」体制の強化、朝鮮出兵へ向けた日米軍事体制の具体化を追求せんとしているのである。

すなわち、「韓国の安全が朝鮮半島における平和の維持にとり緊要であり、また、朝鮮半島における平和の維持は、日本を含む東アジアにおける平和と安全にとり必要である」(共同新聞声明)という、いわゆる「韓国条項」の再確認であり、「かかる平和を維持するために現行の安全保障上の諸とり決めがもつ重要性に留意」(同)するものとして、侵



700名の結集で訪米阻止の決意固める
(8.10代々木八幡区民会館)

略反革命戦争への準備を意志統一しているの
である。

このことは、日米両帝国主義にとつては、
ベトナムでの敗北以降、何としても朴反革命
カイライ政権を維持し、韓国民衆を独裁政治
の下におくことによつてしか、アジアにおけ
る帝国主義支配を維持することができない、
ということなのであり、そのためには、何よ
りも日米安保体制を強化しなければならぬ
ところまで追いつめられていくということ
である。「核使用を辞さない」という米帝の
アジア人民、朝鮮人民に対するおどしや、こ
れに呼応するものとしての日帝の「米国の核
抑止力は、日本の安全に対し重要な寄与を行
う」(同)という露骨な人民弾圧の攻撃は、
逆にアジア人民によつて追い込まれた、日米
両帝国主義の体制的危機をあらわすものでし
かない。

八・二三米訪米阻止の闘いは、このような
帝国主義の核戦争体制へ侵略反革命戦争と対
決し、韓国民衆、アジア人民との革命的連帯
を克ちとるものとして貫徹されたのである。

第二の意義は、七・一七―一九海洋博粉砕
皇太子訪米阻止、沖繩全島軍事基地化阻止
の闘いをうけつぐ連続闘争として闘いぬかれ
たことである。そして、このことを通じて、
安保―日「韓」体制打倒の方向を更に鮮明化
したことである。

七二年沖繩のギマン的「返還」を通じて、
めざされた五・一五侵略反革命体制の野望の
本質が、この七・一七―一九海洋博粉砕闘争
の中で、ますます明らかにされたのである。
沖繩人民の怒りの決起は、そのことをあばき
出すものとしてあつたのである。

すなわち、日帝ブルジョアアジアの意図が、
沖繩の全島軍事基地化にあり、そのことを通
じて、アジア侵略反革命、とりわけ朝鮮出兵
に向けた出撃拠点として、「ストロングポイン
ト」として沖繩を打ち固めることにあるの
だ。そうしたことの保障として、海洋博開催
に名をかりた沖繩基地の強化と、皇太子訪沖
による沖繩人民の反革命統合攻撃がめざされ
たのである。沖繩人民を日帝支配下に組みこ
み、アジア侵略反革命の尖兵に再びかりだそ
うとすることに對し、沖繩人民は、歴史的抑
圧の中から、この本質を見ぬき、これと果敢
に対決したのである。

アジア侵略反革命に唯一の生命線を見いだ
さざるをえない日帝にとつては、もはや一刻
の猶予も、一つの妥協もできないところにな
ってきている。海洋博の強行による、全島軍事
基地化、皇太子訪沖による沖繩人民のまきこ
みは何としても、いかなる人民の反対にあつ
ても強行する以外にはなかつたのである。

このことの中に、アジア最後の反革命生命
線、安保―日「韓」体制の強化によつてアジ
ア人民支配をなさんとする日帝の野望がはつ
きりと暴露されている。

このことを理解することができない者にと
つては、すなわち、七・一七―一九の闘いが
安保―日「韓」体制の強化攻撃との闘いであ
り、朝鮮出兵へ向けた日帝の反革命野望を打
ち砕く闘いであり、そして八・二三米訪米阻
止の闘いと結合されるべき闘いであることを
みぬくことのできない者にとつては、九・三
〇天皇訪米の帝国主義攻撃の意図をみぬくこ
とはできないし、帝国主義天皇制攻撃との対
決を忘却せざるをえないのは、当然といえる
のだ。

日帝の三木訪米を通じた反革命攻撃に對し
われわれは、天皇訪米阻止に至る激闘の三か
月の第二波として、七・一七―一九闘争の成
果をうけつぎ、安保―日「韓」体制打倒の隊
列を更に打ち固めたことをはつきりと確認し
なければならぬ。

第三の意義は、昨年十一月一八以降、急速
に強化されてきた破防法弾圧体制、十六万敵
戒体制に對し、これを打ち砕く実力闘争とし
て戦闘的に闘いぬいたことである。とりわけ
七・一九闘争における、全国労共闘の笠置同
志に對する不当逮捕・起訴に抗し、これに反
撃するものとして、権力機動隊の壁を打ち破
り闘いぬいたことである。

体制的危機を民主的ボーズによつてしては
もはやとりつくりうることが不可能となつた、
日帝支配者共の凶暴なあがきが、このことの
中にあらわれている。帝国主義天皇制攻撃を
通じた反革命弾圧体制の強化、反「過激派」
キャンペーン、革命的左翼に對する組織破壊
攻撃にもかかわらず、安保―日「韓」体制強
化に對決し、朝鮮出兵策動と對決せんとする
革命的人民の波は、今やますます大きなうね
りとなりつつある。権力の暴虐が強化され
ばされるほど、プロレタリア人民の怒りはま
すます巨大なものとなり、闘う意志は更に打
ち固められていくことは、韓国民衆の闘いを
みれば明らかである。

わが戦旗派が、全国の革命的人民と固く結
合し、アジア人民、韓国民衆との固い連帯の
もとに前進する限り、絶対に権力はわれわれ
の闘いを圧殺できないのだ。それどころかこ
の間の闘いによつて、支配者共の意図とは反
對に、多くの人民が安保―日「韓」体制打倒
の闘いに決起しつつあることをわれわれは確
認することができる。

この激闘の三か月を、われわれは何よりも
圧倒的な人民をわが隊列に結集せしめ闘いぬ
き、権力の弾圧を無力化せしめねばならぬ。
天皇訪米阻止の圧倒的隊列をもつて羽田へと
進撃し、権力の壁をズタズタに粉砕しぬく闘
争を何としても実現しようではないか。

八・一〇戦旗派政治集会の 全成果を天皇訪米阻止決戦 へそそぎこめ

昨年七・七集会以降、激闘につぐ激闘の中
で、不拔の第三次ブント建設を推進してきた
われわれは、八・一〇、七〇〇名の結集をも
つて全党全人民の炎の決意を打ち固め、戦旗
派政治集会を、アジア人民への血債にかけ、
天皇訪米を絶対に阻止していく戦闘宣言の場
として実現した。

集会における第一の意義は、なによりもま
ず、九・三〇天皇訪米絶対阻止、安保―日「
韓」体制打倒の激闘の三か月を闘いぬく決意
を、全党全人民の意志を結集し、打ち固めた
ことである。

現在の階級攻防の煮つまりは、明らかに、
ベトナム・インドシナ人民を先頭とした、長
い間帝国主義に抑圧され、差別されてきた人
民の総反撃と、他方、新植民地的支配の
貫徹をもつて侵略反革命を遂行せんとする帝
国主義者どもの、みじめな敗北に根拠をおい
ている。しかも前者は自己を解放し、一切の
支配と抑圧を打ち砕く正義の戦争をたたかっ
ているのに對し、後者には一片の正義性もな

く、自らをますます孤立へおこし、死の道
へとつき進む以外に道はない、という事実で
ある。

従つて、追いつめられた帝国主義者に残さ
れた唯一の道は、互いに身をよせあいながら
密集した反革命攻撃をしかけることによつて
延命(勝利ではない)する以外にないので
ある。安保―日「韓」体制の強化攻撃こそが
その具体的現れであり、朴カイライ政権によ
る、韓国民衆弾圧、独裁支配のための「内戦」
体制も然りである。

帝国主義支配の危機が、今や朝鮮危機とし
て集約されていることは、帝国主義自身が認
めていることであり、安保―日「韓」体制を
めぐる階級攻防こそが、アジア人民・日本ブ
ロレタリア人民の一大重要環となつているこ
とはもはや明確である。

朴反革命カイライ政権の、「北の侵略」を
口実とした、民衆への許すことのできない弾
圧、自由の抹殺は、他ならぬ朴自身の人民の
反撃に對する恐怖のあらわれであり、「戦争
体制」への突入は、決して「共和国が攻めて
くるから」ではなく、韓国民衆に對する支配
が、もはや他のいかなる手段によつても実現
しえなくなつてしまったこと、このこと故
である。金芝河を初めとした「民青学連」事
件被告の再逮捕・拷問、そして緊急措置九号
発令という、帝国主義者でさえ「自由のため」
とはとても恥ずかしくて言うことすらできな
いような支配が、どうして公然と行われてい
るのであるのか。そればかりではない。米帝
国主義者は朴政権を、「北の侵略に對しては
核使用をも辞さぬ」(キッシンジャー)と公
言し、公然と支えることをはばからず、日帝
に至つては、この腐敗せる朴政権を支えるこ
とが日本の安全にとり緊要なのだ、と積極的
に資金援助を行つていふのだ。

これらの具体的実現をめざしたものが、十
一・一八―二二フォード来日訪「韓」、六
・二三宮沢訪「韓」、八・二三米訪米であつ
たのであり、更に八・二八シュレジンジャー
来日(一訪「韓」)、九・一四―一五日韓閣
僚会議、そして九・三〇天皇訪米へとつき進
まんとしているのである。この一連の安保―
日「韓」体制強化、朝鮮出兵策動の攻撃が三
木戦争準備内閣によつてなされんとしている
のである。

このような韓国民衆を愚弄し、暗黒の支配
をおしつける策動が、どうして許されるので
あろうか。われわれは絶対に許すことはでき
ない。日帝の韓国への、こんなにも強権的な
侵略反革命を、どうして日本プロレタリア
人民が黙つて見すごしえようか。断じて否
である。

われわれが激闘の三か月を死力を尽して闘
いぬくことの根拠、アジア人民・韓国民衆へ
の血債にかけて九・三〇天皇訪米絶対阻止の
闘いに突入することの根拠はまさにここにあ
るのである。何としてもこの階級攻防に勝利
していかなければならない。

追いつめられた日帝にとつて、国内人民の
反撃を阻止し、戦争準備体制を排外主義的に
造りあげることには、緊要の課題となつてい
る。フォード来日、エリザベス来日、皇太子訪沖
天皇訪米とうち続く一連の天皇を前面化した
策動の意図は何か。これこそが議会を通じた
現在の支配形態にかわる官僚的・軍隊的・警
察的支配への推転をめざす帝国主義天皇制攻
撃なのである。「平和と民主主義」を掲げ所

とする小ブルの政を粉砕し、安保「日」韓体制の強化・アジア侵略反革命への道に人民を動員せんとしているのだ。われわれは、こうした日帝の安保「日」韓体制強化の要、不可分一体のものとしてある天皇訪米を絶対に阻止する覚悟を満天下に示したのである。

この七〇年代中期の最大の階級攻防の要、天皇訪米に対して、全党・全人民は、正義の戦争、蜂起・内戦の思想を更に打ち固め、プロレタリア解放の未来を獲得するために、政治的・組織的武装を準備していかなくてはならない。

第二の意義は、七〇年代中期階級闘争の基本的路線と規範を確定したことである。

基本的路線の第一は、アジア人民への血債・猛省精神で闘いぬくということである。

これこそが三・一金芝河アピールに真に込めざる道であり、同時に、日帝足下で闘いぬいているプロレタリア人民にプロレタリア国際主義の正しい方向をさし示すものである。

そして猛省・血債の実現は、アジア人民にとっての諸悪の根源であり、韓国民衆の解放にあって最大の桎梏となつて安保「日」韓体制を、日本プロレタリア人民の力で打ち砕くことである。

第二には党と革命勢力の武装と団結によって闘いぬくことである。

激動のアジア情勢の中で、多くの人民が立ちあがりつつあるが、その中で、一方ではサンディカルズム、他方ではテロリズムをも生み出している。

このような情勢においてこそ、レーニンが『なにをなすべきか？』で何度も何度も訴えたこと、すなわち、大衆の自然発生性に身をゆだねることではなく、党の目的意識性に結合された、蜂起への道を系統的に準備することが問われているのである。このことを放棄することは、敵を前に武装解除することであり、敗北への道をひた走る以外なくなるのだ。

この激闘の三か月のまっただ中で、被抑圧人民に真に連帯しぬく党風を打ち固め、革命戦争へ向けた思想的・政治的武装をつかみとることを、わが党と革命勢力の一大課題としなければならぬ。

第三にわれわれは、あくまで経済主義的害毒と闘い、組合主義的政治と訣別し、全人民的政治闘争によつて、プロレタリア人民をわが隊列に結集せしめることであり、同時に武装闘争のあくなき追求と、暴力革命の思想を絶対に堅持しぬくことである。

「反戦平和」運動にしがみついている限り日帝の侵略反革命戦争を絶対に阻止しえないばかりか、その尖兵へと動員される道しか残されていない。われわれはあくまで党と革命勢力の武装を追求し、革命戦争、蜂起・内戦の思想を更に打ち固めることにより、「強大」な米帝を打ち破つたベトナム・インドシナ人民の革命戦争に込めざる、日帝打倒の巨大な隊列を構築しきらなければならぬ。

このような路線を堅持しぬくと共に、次の戦術決定における四つの規範をはつきりとおさえておかななくてはならない。

その第一は、広く深い人民の政治的動員を

克ちとることであり、第二には、そこにおいて人民大衆自らが政治的経験を深め、またそれを通じて学び革命的積極性を培養することであり、第三には鮮明な政治目的の下に闘いぬくこと、第四には、あくまでも組織として闘い勝利するということである。

われわれは、この激闘の三か月を、以上の内容をふまえて克ちとり、天皇訪米阻止決戦の勝利に向けて、全党全人民が打つて一丸となつて進まねばならぬのだ。

八・一〇政治集会の第三の意義は、不拔の第三次プロント建設を通じた、プロントの革命的再生の方向を示したことである。

このことは、六九年安保決戦のまっただ中の第二次プロントの分解という試練の中から戦旗派建設として着手され、五・一三神田武装闘争の進撃と、足立グループの脱走の中で打ち固められ、七・七猛省精神の獲得と、打ち続く安保「日」韓体制打倒の進撃の中でその再生を刻印したのである。

第二次プロントが、六〇年代階級闘争の最先頭を、十・八羽田闘争を突破口として闘いぬいたにもかかわらず、六九年安保決戦へと登りつめる過程で、党的指導の崩壊として結果した。われわれ戦旗派は、赤軍・叛旗にみられる「左」右の日和見主義者の党建設からの逃亡の中で、闘う人民に対して真に責任ある指導をなしうるレーニン主義党の建設に着手することを決意した。

そしてさしせまる七二年沖繩「返還」策動、自衛隊派兵に対決すべく、五・一三神田武装遊撃戦の貫徹を通じて、断固たる武装闘争路線の革命的展開を全人民の前に鮮明にうちだし、日帝に痛打をあげたのである。

このようなレーニン主義・ボリシェヴィキ党の建設と、十・八、五・一三武装闘争の貫徹という革命的路線にもかかわらず、自らの党内からの足立グループの排出という事態はわが戦旗派を更なる試練に直面させた。

われわれは、これを契機に主体的切開を深め、全思想内容を自己批判的であらひなおし、その中から、七四年七・七戦旗派政治集会において、血債・猛省の思想としてつかみとつていったのである。

われわれは、この足立グループとの分派闘争の中で、多くの成果を克ちとることができたと言つても過言ではない。

セクト主義・前衛ショウヴィニズムの克服と、人民に奉仕する作風の確立、カクマルに象徴される純プロ主義と訣別し、アジアの被抑圧人民・被差別人と固く連帯することをこそ追求すること、これらの一切の成果を七・七猛省集会において克ちとつたのである。

七・七以来のわれわれの闘いは、まさしく以上の成果の実践としてあつたのであり、戦闘的部落大衆、石川青年の闘いに学びぬく闘いとして、また韓国民衆・金芝河アピールに込めぬく闘いであつた。そしてベトナム・インドシナ人民の革命戦争の勝利に連帯するものとして打ちぬかれてきたのである。

今八・一〇政治集会における第三次プロントの革命的再生の宣言は、現下の階級攻防の焦点たる安保「日」韓体制との総対決、アジア人民への血債にかけて、「天皇訪米絶対阻止」朝鮮出兵断固阻止の激闘の三か月の中に、この一年の苦闘の成果の一切をそそぎこみ、ますます強固にしていく、そのようなものとしてあるのである。

蜂起・内戦・世界革命戦争の総路線を今こ

そ、第三次プロントの圧倒的建設の中で克ち取つていこうではないか。

八・二八日米軍事会談粉砕 一九・一四日韓閣僚会議阻止に連続決起し、天皇訪米絶対阻止の大水路を切り開け！

すべての同志諸君！

九・三〇天皇訪米絶対阻止闘争をいよいよ目前にひかえ、今や一つ一つの闘いが決定的な重要性をおびていることを確認しよう。八・一〇政治集会の固い決意と、全成果を今秋闘争の一つ一つにそそぎこみ、何としても訪米阻止決戦へ向けた大水路をわが手でできりひらかねばならぬのだ。

天皇訪米阻止決戦へ向けたわれわれの第一の任務は、朝鮮出兵へ向けた日米軍事会談、八・二八シュレジンジャー来日・坂田との会談を圧倒的な隊列でもって粉砕しぬくことである。

この日米軍事会談は、坂田防衛庁長官の「日米防衛分担」構想の具体化をめざし、三木訪米によつて、「日米安保条約の円滑かつ効果的な運用のために一層密接な協議を行う」（共同新聞発表）ものとして意志統一されたものである。

議題の第一は、日米安保条約に基づく、日米軍事分担であり、第二は自衛隊の現状とポスト四次防、第三はベトナム後の米帝のアジア新戦略と、それに対する日帝の評価、第四は朝鮮半島の軍事情勢と将来の武装衝突の見通し、となつてゐる。そして今後防衛庁長官と国防長官が年一回定期的に軍事会談を行つていくというものである。

この日米軍事会談こそ、日帝の朝鮮出兵へ向けた野望を示すものであることを第一に確認しなければならぬ。

これまでの米帝核軍事体制の下での、アジア侵略反革命が、ベトナム・インドシナ人民の革命戦争により吹きとばされてしまったことに対して、アジアの支配に最後の延命線を探めざるをえない日帝が、朝鮮出兵をめざした全面的軍事的まき返しをはかろうとしてゐることは、誰の目にも明らかであり、三木戦争準備内閣の正体を暴露するものである。

第二に、六・二三宮沢訪「韓」による朴カイライへの全面的テコ入れと、八・二三木訪米にふまえた、安保「日」韓体制の軍事的強化としてあることを確認しなければならぬ。

朴カイライ政権への全面的テコ入れこそが日帝にとって死活の問題となつてゐる現在、安保「日」韓体制の強化再編、とりわけ日帝による軍事的補強は不可欠のものとなつてゐる。

「共同防衛上の役割を真剣にうけとめること」（シュレジンジャー）を求められた日帝は、ポスト四次防での帝国主義軍隊近代化として、五二年度から、海上自衛隊の増強、FX（航空自衛隊の次期主力戦闘機）の強化を行うことを決め、「米軍基地の安定的使用」の要求に対して、沖繩を初め、全国の米軍基地を効率的に運用するために、反基地闘争の庄殺をも約束したのである。ことここに至つ

て沖縄全島軍事基地化攻撃の意図がはっきりした。

第三に以上のことから、社共人民戦線派の言っているような、米帝に対する日帝の従属なる認識の誤りをはっきりと批判しておかねばならない。日帝自らがアジアの盟主として積極的支配のり出してきており、そのことに向けて国内人民を排外主義的に統合せんとしていることを確認しなければならぬのだ。

今回、「日米防衛分担」なる坂田構想の出された背景をみれば、「自主防衛」イデオロギーの積極的流通を通じて、「反戦平和」にひたる小ブル的意識をまきこみ、一挙に排外主義的国民統合を実現せんとするものであることは明らかである。しかもこれは、「対米従属」なる批判に対して「自主防衛」「対等の協力関係」なる思想を逆につきつける形でなされているのである。社共人民戦線派はその意味で、帝国主義の朝鮮出兵策動に対して闘う軸をもたないばかりでなく、逆にこれを「左」から支えるものとなっているのだ。

すべての同志諸君！ かかる日米軍事会談の攻撃を絶対に許してはならない。この重大なプロレタリア人民・アジア人民に対する挑戦に対して、断固たる決起でたち向わねばならない。

この闘いは何よりもまず第一に、天皇訪米絶対阻止に向けて激闘を切り開き、更なる高揚をかちとるものとして実現されなければならない。

八・二八闘争の圧倒的爆発の実現によつて訪米阻止決戦の水路を拡大しなければならぬ。八・二三木訪米阻止闘争、八・一〇戦旗派政治集会での一切の成果をこの八・二八にそそぎこみ、日米帝に痛打をあげせなければならぬ。

第二に、日本プロレタリアート人民の責務

を、アジア人民への血債にかけ、韓国民衆の血叫びに応え、朝鮮出兵の謀議軍事会談粉砕として貫徹することである。

そして第三に、わが戦旗派と革命勢力の隊列を整え、蜂起し内戦の思想で武装しぬき、安保一日「韓」体制打倒の巨大なうねりをつくりだし、機動隊の警戒体制、破防法弾圧体制を突破して闘いぬくことである。

ベトナム・インドシナ人民に対する公然たる敵対、韓国民衆に対する暗黒支配の公然たる宣言、沖縄人民を初め、日本プロレタリア人民をアジア侵略反革命の尖兵として動員せんとする野望に対して、われわれ戦旗派は、党と革命勢力の武装を軸に、革命的人民の総反撃によつてこれを粉砕し、闘うアジア人民との連帯によつて、日帝を包囲せん滅しぬかねばならない。

天皇訪米阻止決戦へ向けた第二の任務は、韓国侵略反革命全韓国の「馬山」化をねらう日韓閣僚会議を粉砕し、訪米阻止への大高揚を創出することである。

六月宮沢訪「韓」によつて金大中事件のベテンの処理を行い、八月三木訪米によつて確認された安保一日「韓」体制の強化、朴カイライ政権への全面的テコ入れを具体化させるものとして、日韓閣僚会議が開かれようとしているのだ。

われわれはこれを、日米軍事会談に続く、安保一日「韓」体制の強化の攻撃としてとらえ、日帝の朝鮮侵略反革命戦争への道、朝鮮出兵阻止闘争として打ちぬくことを第一に確認しなければならぬ。

第二に日帝の最後の生命線であるアジア侵略反革命、とりわけ全韓国の「馬山」化を目標む野望を打ち破るものとして闘いぬかねければならぬ。

①政府ベースの軍事経済援助の具体化、②

韓国重化学工業化計画への輸銀の商業ベース借款の具体化、③日韓大陸棚協定の批准、を通じてなされようとしている日帝の野望は、全韓国の「宗主」として再び朝鮮人民の頭上に君臨し、アジア侵略反革命の足がかりにせんとするものである。われわれはこの策謀を直撃し、日帝の野望を粉砕しなければならぬ。

第三に、閣僚会議が緊急措置九号、「戦争体制」による暗黒支配をほしのままにしていく朴に対する公々然たるテコ入れとしてあることをはっきりと見すえ、韓国民衆に対する敵対攻撃を、日本プロレタリアート人民の血債にかけて粉砕し、金芝河アピールに込めるべく闘っていかねばならない。

いかなる弾圧にも屈せず英雄的に闘いぬいでいる韓国民衆の「不倶戴天の敵」として、この腐敗し墮落しきつた朴を軍事・経済的に支え、カイライとして南北の革命的統一をめざす朝鮮人民を抑えこもうとするこの反革命謀議を何としても阻止しなければならぬ。

第四に八・二八に続く九・三〇へ向けた第二のステップとして、天皇訪米絶対阻止への全人民的爆発・血路を切り開くべく闘いぬくことである。

この闘いを通じて九・三〇へ向けた基礎を打ち固めなければならない。破防法弾圧体制攻撃のまっただ中でこれを粉砕し、蜂起し内戦に向けて進撃せよ！

すべての同志諸君！ 激闘の三か月、八・二八一九・一四闘争をわが戦旗派の成果の一切をかけて戦い取れ！ 死力を尽して天皇訪米阻止を闘いぬき、アジア人民に対し、日本プロレタリアート人民の連帯の道をさし示せ！ ベトナム・インドシナ人民に込め、金芝河アピールに込めざる闘いに、すべてを投げうって決起せよ！

8・11、2朝鮮出兵策動へ連続鉄槌

反革命「宗主」会談

粉砕へ二千名が総決起

全国の同志友人諸君！ 戦闘的労働者、学生、皆さん！

八・一一の三木訪米阻止の闘いは、日帝の朝鮮出兵策動に痛打をあげ、侵略反革命を絶対に許さないという決意をつきつけるものとして戦闘的に打ち抜かれた。

日帝三木の訪米は、ベトナム後の危機にひんする帝国主義支配の強化を目論むものとして強行された。七・一七一九闘争をうけつぎ、そのよる日米反革命「宗主」会談を阻止すべく、日本労働者階級人民の血債にかけ断固として闘いとられたのである。

海洋博粉砕！ 皇太子訪米阻止を

「激闘の三か月」の突破口とし、日帝の侵略反革命との徹底対決へと突き進んできたわれわれは、八・二八闘争の爆発をつうじ、今秋天皇訪米へと着実に前進をかちとつたのである。

シュレジンジャー来日、日「韓」閣僚会議として天皇訪米と矢継ぎ早に行われんとする日米帝国主義者共の反革命策動に鉄槌を加え、ベトナム・インドシナ人民、韓国民衆の闘いに呼応し、安保一日「韓」体制打倒へと進撃しなければならぬ。

歴史的動乱のこの激闘の三か月に何としても勝利し、日帝の侵略反革命（戦争）を蜂起し内戦へ転化すべく総進撃をかちとれ！

焼けつくような炎天下、八・二三木訪米阻止現地集会は開始された。全国から羽田へ結集した二千の労働者人民は、朝鮮出兵策動への怒りも新たに、戦闘的決意を打ち固めたのである。

労働者人民の怒りの爆発をおそれ、機動隊による二重三重の検問、弾圧体制をしいてきた権力の反革命策謀を打ち破り、続々と結集する労働者人民。「安保一日「韓」体制打倒！ 三木訪米阻止！」の旗を高くかかげ、三〇〇の不屈の隊列を登場させた労働共闘の赤ヘル部隊。公園狭しと林立する赤旗。

これらはすべて、朝鮮出兵を目論む三木一フォード反革命「宗主」会談に対する、日本労働者人民の

戦闘的決意のつきつけなのである。各団体から戦闘的決意表明がなされ、「朝鮮出兵策動粉砕！ 三木訪米実力阻止！」の戦闘的気運が会場の西蒲田公園にあふれる中で発言に立った労働共闘の代表は、

三木訪米が朝鮮侵略反革命戦争への準備をなすものであり、日帝の朝鮮出兵を血債にかけて粉砕すること、現下の帝国主義天皇制攻撃に断固対決し、打ち破っていかねばならないことを訴え、闘いの方向を明らかにしていったのである。

この日のデモは、韓国民衆と連帯すべく、機動隊の阻止線を肉弾でぶち破り、終始戦闘的に闘い抜かれた。

八列、十列の強固な隊列で重戦車のように前進する労働者人民は、三木を守り羽田へ進撃させまいとする機動隊の壁にぶち当たり、ぐいぐい押しまくった。

「三木訪米を許すな！」「安保一日「韓」体制打倒！」かけ声をふりしほり、炎天下汗だくとなつ

て前進する部隊を押しどめるところではできない。機動隊はいたるところで押しつぶされ、労働者人民の怒りを思い知らされたのである。なお、八・二羽田現地闘争に先立ち、八・一に三木訪米阻止の総決起集会が清水谷公園でかちとられ、結集した三千の戦闘的労学は固い決意をもって三木訪米を羽田現地で阻止することを確認したのである。

安保一日「韓」体制へ痛打、天皇訪米阻止へ前進

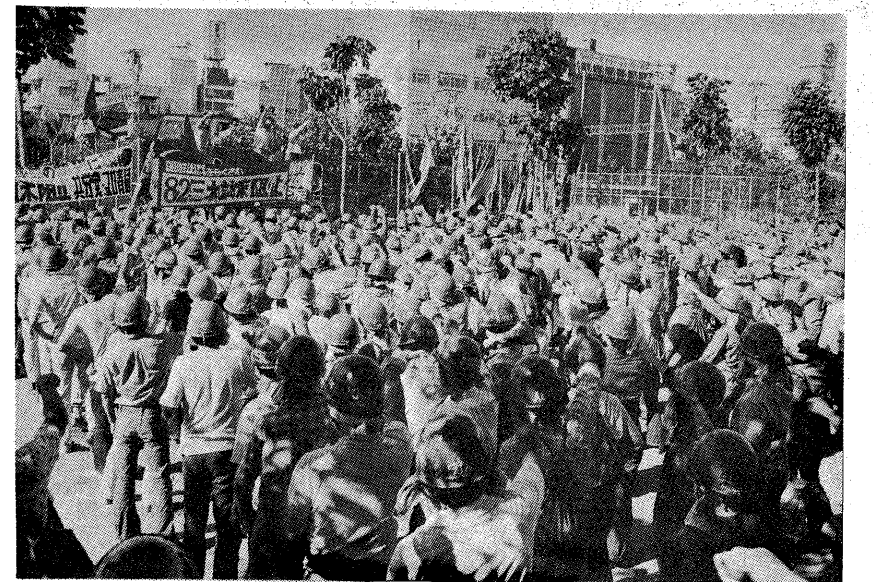
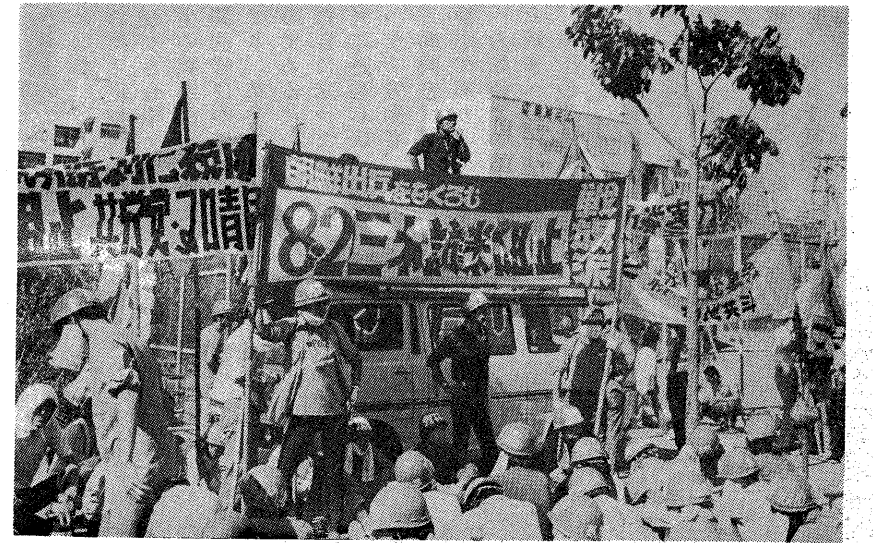
八・一―三木訪米阻止闘争の意義は重要である。それは第一に三木訪米による、三木一フォードの反革命「宗主」会談を阻止すべく闘い抜かれたことである。

「事実上の戦争体制」へ移行するほど危機を深めている「韓」国朴政権への反革命的テコ入れを目指し、日帝にとっては全韓国の一馬山化」とそのための出兵策動を意志統一するものとして三木の訪米があったことは、今や全人民の前に明らかになっている。

八・一―二の闘いは、日帝のこの策動に対し、韓国民衆との国際主義的連帯を深め、血債にかけても朝鮮出兵を許さないという日本労働者人民の闘い決意を日帝にたたきつけ、安保体制、日「韓」体制の反革命再編への痛打をあげたのである。

三木訪米阻止闘争の第二の意義は、七・一七―一九海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止闘争の革命的意義を継承し発展させるものとして、安保一日「韓」体制打倒に向けた激闘の三カ月の第二弾の闘いとして戦闘的に貫徹されたことである。「韓」国朴政権の危機が深まれば深まるほど、日帝の朴政権への経済的テコ入れは強まり、自衛隊の朝鮮出兵策動はますます強められている。

われわれは、「韓」国の危機の深化にともなう安保一日「韓」体制の急速な再編過程を「激闘の三カ月」としてとらえ、今秋天皇訪米を頂点とするこの攻撃に徹底対決する必要があるが、三木訪米阻止の闘いは激闘の三カ月の一大高



上：戦旗派労共闘を代表し発言する伊勢同志（8.2西蒲田公園）
下：西蒲田公園にとどろく労学2千のシュプレヒコール！

揚をかちとり、天皇訪米阻止へのステップをなす決定的に重要な意義を有しているのである。

この闘いを更に発展させ、天皇訪米絶対阻止をつうじ、日帝の侵略反革命（戦争）体制構築に対し、全労働者人民の蜂起―内戦をもつて応えていかねばならない。

最後に、八・一―二の闘いは、昨秋フォード来日以来恒常化されたつつある、国家権力の破防法弾圧体制と対峙しつつ闘い抜かれたことである。

今や数万、十数万の機動隊、大量の装甲車等をもつての弾圧体制は、日帝の危機の深まりと比例して強まりつつある。機動隊の隊長が卒先して革命的部隊に対しテロ・リンチを加えるなど、弾圧の質はエスカレートし、朝鮮出兵に向けた国内治安体制の破防法弾圧体制は飛躍的に強化されている。

しかし、この弾圧の強化は日帝の危機の表現であり、労働者人民の闘いの前には必ずや打ち破られるものなのである。

八・一―二の三木訪米阻止の闘いは、このような日帝の国家権力の反革命包囲網を打ち破り戦闘的

に貫徹されたのである。

われわれは、この闘いが切りひらいた地平にしっかりと立ち、戦

略的展望のもと、八・二八シュレジンジャー来日阻止、九・一四―一五「韓」閣僚会議粉砕、そして天皇訪米阻止への不屈の決意をうち固め、怒りの前進をもって激闘の三カ月に勝利していかねばならない。

何としても安保一日「韓」体制を打倒し、韓国民衆の血叫びにこえ切らなければならないのである。

今や急速に再編されんとしている日米反革命支配者のアジア新植民地主義的支配は、日帝国内では破防法弾圧体制の強化として闘う労働者人民にかけられてきていて、この攻撃と真つ向から対決し安保一日「韓」体制を粉々に打ち砕くものとして、朝鮮侵略反革命戦争を絶対に阻止する革命的闘いを貫徹していくことが問われているのである。

日米反革命支配者の腹黒い野望に蜂起―内戦をもつて応え、今秋天皇訪米を絶対阻止せよ！

天皇訪米阻止闘争の大爆発のために圧倒的カンパを！

全国の戦闘的労働者、学生、高校生のみならず、八・二三木の訪米と米大統領フォードとの会談に見られるように、インドシナ革命戦争に敗北した帝国主義は、体制的延命をかけ必死のまき返し策動を強めています。

とりわけ日本帝国主義は、朝鮮の新植民地主義的支配の維持・強化に死活をかけ、安保一日「韓」体制の強化と具体的な朝鮮出兵―侵略反革命戦争へと打って出ようとしています。その中で来たる九月三十日の天皇ヒロヒトの訪

米は、安保一日「韓」体制強化の頂点ともいえるべき攻撃であり、われわれは天皇をかつき出して日本の労働者人民を侵略反革命に動員せんとするそのような攻撃に対し、血債をかけた絶対阻止する決意をします。

七・一九沖繩海洋博粉砕闘争で不当にも逮捕―起訴された労共闘笠置議長の保釈をかちとり、天皇訪米を日本労働者人民の怒りで阻止し、抜く闘いの爆発を実現するために、圧倒的なカンパを寄せられるよう要請します。

訂正とお詫び

「戦旗」三五九号四頁本文中、足立グループ七・一七闘争にかんする論述のなかで、「まさにひめゆりの塔の墓穴は、足立グループそのものの墓穴であり……」なる一節がありました。この一節は当日の沖繩人民の闘いに対する積極的評価、「ひめゆりの塔」に対しわれわれ日本人が持つべき姿勢などとの関係において、適切でないと考えられますので以下のよう訂正し、お詫びいたします。「まさにひめゆりの塔よりの闘いは、一方では沖繩人民の革命性の爆発でありつつも、他方では足立グループそのものの破綻への道であり」以下「そこで破裂したものは矛盾であり」に続きます。

戦旗編集局

権への反革命テコ入れへのめり込み・自衛隊の朝鮮出兵策動の強まりとともに、日帝足下の労働者人民への帝国主義天皇制をもってする攻撃は熾烈をきわめる一方である。

われわれはこの攻撃が帝国主義者の最後のあがきであることを正しく見つけ、それ故闘いの一層の爆発をもって応えていくのでない。

ればならない。

日帝の朝鮮出兵策動を血債にかけても阻止することは、日本労働者階級人民の責務である。われわれ問われていることは、今こそ決意も新たに帝国主義の反革命攻撃に抗し、安保一「韓」体制打倒・天皇訪米阻止の戦闘宣言を発し、激闘の三カ月に勝利することである。

八・一〇政治集会の戦闘宣言をわがものとし、天皇訪米絶対阻止への総決起をちとれ

8・10政治集会によせられた石川一雄氏アピール

「部落解放闘争は天皇制そのもの、天皇制をかつぎ出して支配を固めんとする帝国主義そのものを打倒せねばならぬ」

戦旗派大政治集会に御参加下さった全ての皆様。本日は意義深い政治集会に御出席下さり、誠に苦勞様に存じます。

昨年の本会へ向けたアピールには、決して幻想を抱いていたわけではありましたが、十余年の法廷内外闘争によって、無罪判決以外にない、と確信に満ちた挨拶状を出させて頂いたのでありましたけれど、国家権力の番犬である差別裁判長寺尾の大暴挙に夢と化してしまつてより十カ月になろうとしています。寺尾の不当判決に対し報復するまでは死に切れない私であり、今後本会の皆さん方をはじめ、国家権力の不条理に立向つておられる全国の全ての有志にご協力を仰いで、いちにも早く寺尾の野郎に鉄鎚を浴びせねばと、身体が獄中にあるだけでもどかしく、日々苛立って居るのであります。

しかし反動の最先端をゆく寺尾が有罪判決を下したことによつて怒りを激しくかきたてているのは、私や部落の兄弟のみならず本会場の皆さん方も同様に感じておられるからこそ、日夜石川一雄の無罪獲得の為にあらゆる職場に於いて訴え活動に取組み、多大なるご協力下さつておられるのであり、従つてこの寺尾判決が部落大衆と労働者人民の狭山闘争に新たな永続化・激化・発展の導火線となつて、国家権力との一層非和解的な対決という新たな階級関係、新たな土台に一層激しく突き進んでいる現実を知つてみれば、近い将来、必ずや支援者各位の団結の下で、権力の犬どもを踏拉いて、狭山闘争の歴史的大水路を切り開いて下さる事を確信して、私も十三年間の長期間、狭い獄中に閉ざされていようとも、更に不屈の闘志をかきたてて、あの十・三一反革命判決の時の無念をかみしめ、怒りをこめて権力・支配者階級に突き出し、私の狭山闘争は当然ながらも部落解放・革命に向つて進撃を開始しようと思つて居るのであります。

ところではなし変つて海外に目を転ずれば、ベトナムの労働者人民はあの強大暴虐なアメリカ帝国主義を粉砕し、遂に歴史的な大勝利をおさめ、カンボジアの解放革命戦争の勝利と共に、未来は決して帝国主義者のものでなく労働者人民のものであることを全世界にさし示しました。「次は朝鮮の解放だ」と言われる情勢の中で、韓国の朴チンナム政権は言語を絶するファッショの大弾圧の限りを尽して社会主義者や民主主義を求めた文化人・言論人を投獄し、虐殺して労働者人民を苦しめています。

日本の帝国主義者もこうして段々と身近に迫つて来る労働者革命の足音に恐怖し、軍隊（自衛隊）を増強したり警察権力や司法権力（裁判所）を強化したりして、労働者の闘いの高揚を抑圧せんと必死です。こうした情勢の中で、特に革命を目指す私達が粉砕しなければなりませんのは、皇太子の沖繩海洋博出席・秋の天皇のアメリカ訪問等々、帝国主義が天皇制を積極的にかつぎ出し、天皇の力をもつて政治支配・国民支配を強化しようとしていることをはっきり把握し、これと対決する闘いとして重要性を増していると思つています。

これは「……貴族があれば賤族あり」との命題（松本治一郎先生）が示す様に、天皇制の確立は身分制度の確立であり、部落の

一層近代的身分制度として固定化され、従つて部落差別は拡大助長されてゆく攻撃と把握せねばならないと思つています。だからこそ結局は「皇国皇民運動」に屈服した戦前の解放運動の苦しい闘いから学んで、部落解放は天皇制そのもの、天皇制をかつぎ出して支配を固めんとする帝国主義そのものを打倒せねばならぬと思つます。部落解放闘争のその様な方向性が重要になつて居る現段階と言えましよう。

昨年の十・三一高裁寺尾による差別判決以来、部落解放同盟は当然のこと、解同傘下の諸支援団体にあつては部落解放闘争の局面を「国家権力・右翼融和主義・日共差別者集団による反動攻撃に反対し、部落解放闘争の階級化・革命化を推進しつづ闘う」という考えの下で広く人民に訴えて居るようです。それに八鹿高校問題や、差別映画「橋のない川」連続上映、そして「正常化連」のデッチ上げ等の差別キャンペーンを部落の兄弟達を先頭に実力で糾弾し、阻止して闘い抜いておられる事を知るにつけ、私は何よりも喜んでおり、特に日共は私の狭山闘争から逃亡し敵対し、十・三一差別判決に賛同し、その差別的な本質を純化し、全ての労働者から孤立しています。今後も日共のデマキャンペーン・差別キャンペーンを絶対に許さず、糾弾し広汎な労働者の団結で彼等を追撃してゆくべく奮闘して欲しいと思つています。

勿論私も、いえ私達部落民があらゆる場に於て不当に差別され、人権を無視されて参りました屈辱の歴史の中に於て、私は自分の身の上に振りかかつて来た「狭山事件」の犯人に仕立て上げられた迫害をただ無罪を主張し、勝取るだけに終る事なく、根本的に事件の背景となつて居る部落民に対する予断と差別偏見によつて現われている司法暴力の実際を訴え、一般国民の良心に訴えて差別のない部落の完全解放の一翼を担うべく部落問題を学ぶと共に、決意を新たに今後の最高裁闘争に全精力をささげてゆく決意であります。

それにしても今や戦後世界体制の解体的危機と日本帝国主義の体制的危機の深まりの中で、その乗り切りをかけて日帝はアジア侵略と国内反動の道を突き進んで居り、戦後史上かつてない革命的情勢が世界的規模で炎となつて大爆発している現在、部落大衆を最先頭に融和主義粉砕・部落解放・日帝打倒の旗の下、全ての労働者階級人民が巨大な奔流となつて日本革命の未来をかけて狭山闘争を勝利に導く為に統々と決起しつづつあることに私も励まされ、十二年間の獄中の悲惨な苦痛の中で更に不屈の闘争を続けてゆかねばと決意をしております。どうか皆様もより以上のご協力下さいませよう心より御願ひ申上げて本日の私の御挨拶と致します。本日に貴重なお時間と訴えの場を与えて下さりありがとうございます。

一九七五年八月十日

東京拘置所在監 石川一雄

戦旗派政治集会ご参加一同様

10・31寺尾大暴虐判決はねのけ

最高裁判上吉田体制打倒 石川氏完全奪還へ

1 日帝の朝鮮・アジア侵略 反革命と対決し、狭山闘 争の歴史的勝利を克ち取れ

ヴェトナム・カンボジアを初めとするインドシナ人民の民族解放・革命戦争の勝利は、戦後帝国主義の新植民地主義の支配をくじり、崩壊の極に至らしめ、第三世界人民に対する新植民地主義的支配を不可欠とする戦後世界を規定してきたヤルタ体制の現実、米ソ平和共存体制をもくじり、戦後帝国主義の解体的危機を決定的に深化せしめている。侵略反革命を深める帝国主義の寄生と腐敗の深化、没落、民族解放・革命戦争を軸とする革命の成熟と勝利という現在の国際階級動向こそ現代過渡期世界の基調であり、この現代過渡期世界こそ、世界プロレタリア独裁・世界共産主義への歴史的過渡期として、戦争と革命がますます激化することを必然化せしめている。かかる戦争と革命の激突の時代の到来こそ、共産同の世界戦略「世界同時革命」がその真価を発揮すべき時代の到来なのである。

米日帝国主義は、かかるインドシナにおける敗退と、対極に形成された革命の成熟という帝国主義支配の根底的危機に直面し、帝国主義世界の存亡をかけた侵略反革命と侵略反革命戦争の絶望的激化をもつてこたえんとしている。とりわけ資源略奪を不可欠とするアジア唯一の帝国主義日帝は、アジアの革命の前進に恐怖し、安保日「韓」体制を侵略反革命戦争遂行体制へと強化し、五・一五侵略反革命体制の護持と強化を、革命的労働者人民に対する破防弾圧体制、部落大衆に対する十・三一体制、在日アジア人に対する入管体制、一・一六体制、を基礎として帝国主義天皇制攻撃をふりかざし、これをテコに朝鮮・アジア侵略反革命へと急ピッチにのめりこまんとしている。

十・三一差別判決糾弾、八鹿高校差別事件糾弾闘争をもつて十・三一体制と対決してきたわれわれは、この力の中に、最高裁をめぐる新たな狭山闘争の歴史的勝利の展望をはつきり確信し、狭山上告審闘争の全人民の大爆発にむけて奮闘しなければならぬ。

それとともに、十・三一寺尾差別判決体制に立脚し、「上告棄却―石川有罪」路線をもつて石川氏を闘から闘へとほうむり、部落解放闘争の革命化に巨大な役割を果たしてきた狭山闘争をおしつぶし、朝鮮侵略反革命への道を突き進まんとする日帝と、最高裁判上―吉田体制に対し、「帝国主義の腐朽性に抗し、被抑圧民族・人民と連帯し、帝国主義の共同反革命を峰起・内戦―世界革命戦争へ」「日

帝の侵略反革命(戦争)を峰起・内戦へ」「五・一五侵略反革命体制粉砕、安保日「韓」体制打倒」「部落解放・日帝打倒・融和主義粉砕」の中に狭山闘争を確固としてとらえきり、日帝の朝鮮・アジア侵略反革命と真向から対決していかなければならない。

狭山差別裁判が、日帝の侵略反革命攻勢の激化の中で、侵略反革命体制構築の攻撃の生命線へとおしあげられ、日帝が死活をかけた、朝鮮・アジア侵略反革命の成否をかけて暗黒の狭山差別裁判を強行しようとしている限り、狭山闘争の歴史的勝利への道は、日帝の朝鮮侵略反革命(戦争)と対決し、内乱へ、蜂起・内戦へ転化する闘いの中に正しく位置づけることによって切り開かれるのであって、狭山闘争の全人民的、根底的なところからの爆発は、かかる方向で狭山闘争を闘いぬくこと

によって初めて可能なのである。「あの十・三一反革命判決の時の無念をかみしめ、怒りをこめて権力・支配者階級につき出し、私の狭山闘争は当然ながらも部落解放・革命に向って進撃を開始しよう」と決意を新たにし」と巨大な革命戦士となって先頭で闘う石川一雄氏と共に、戦闘的部落大衆と共に必ずやこの歴史の大業は達成されねばならないのである。

2 十・三一「無期懲役」 デッチ上げ差別判決を徹底 糾弾せよ!

狭山闘争の歴史的勝利をめざし、上告審闘争を闘い抜くわれわれは、狭山差別裁判を新たに暗黒の部落差別裁判たらしめている決定的構成要件であり、最高裁判上―吉田体制の土台をなす寺尾「無期懲役判決」の犯罪性、デッチ上げ差別犯罪、その罪状を徹底して暴露しなければならぬ。

寺尾「無期懲役判決」の犯罪性の第一は、権力の差別犯罪の全てを追認し正当化したことである。無実の部落青年石川氏を何があんでも「犯人」にデッチ上げがために行つた違法な差別逮捕であることは明白であるにもかかわらず、「違法不当のかどは存在しない」「本件の捜査に役立つ」と追認し、警察・検察の部落に対する差別的集中的見込み捜査、肉体的・精神的拷問、「自白」のデッチ上げ、「三大物証」なるカバン・万年筆・時計等「証拠」のデッチ上げ等に対し、「警察に(差別デッチ上げの)作為性はない」と追認し、その他これらに対する裁判所の結託である逮捕令状・捜査令状・勾留状発行・接見禁止等

等、一審二審内田幸吉・中田登美恵証人の偽証、弁護側証人・証拠の採用拒否、石川氏無実の証拠の隠トク、一審差別論告、内田「死刑

判決、井波の強権的訴訟指揮による差別裁判の強行等々、無実の部落青年石川氏を「犯人」に仕立て上げる国家権力の差別犯罪を全て追認、正当化したのである。

その第二は、石川氏の無実を百も承知の上で、白を黒と言いくるめるベテンをなしているということである。

石川氏は無実である。①石川氏には、アリバイがある。事件当時、入間川駅荷小屋で雨やどりをしており、石田豚屋の車が通り、運動会帰りの十人以上の中学生を確認している。②脅迫状の筆跡は石川氏のものではない。警察の「鑑定」は全くデタラメであることが明らかとなった。③「自白」に基づいて「発見」された「三大物証」カバン・時計・万年筆はいずれも中田善枝の所持品ではなく警察のデッチ上げである。石川氏の自宅の「発見」から「発見」されたという万年筆は、前二回の徹底した家宅捜査によつても発見されず、三回目の家宅捜査の前々日、警官が無断で石川氏宅に上がり込んで工作されたものである。それに普通の大人なら見るところから「発見」されたのだ、ということも警察のデッチ上げを明らかにしている。④「物証」のどれにも石川氏の指紋がまったくないという事は、「物証」と「自白」のデッチ上げを証明している。⑤身代金を取りに来た時に残された足跡は、石川氏のものとはちがうことも石川氏が「犯人」でないことを証明している。⑦埋葬に玉石が使われているが部落民にそのような風習はない、ということが石川氏の無実を立証している。⑧多量の残土の廃棄は、石川氏には無理であることは、その無実を立証している、等々の弁護側の科学的立証に対し、寺尾は、全て憶測と専断、こじつけのベテンをもつて言いがれ、白を黒と言いくるめて圧殺し、「石川有罪」をデッチ上げたのである。

弁護側の「自白」と客観的根拠とがく違っているという事実は「自白」のデッチ上げを証明している」という主張に対し、寺尾は「被告人が死刑を免れたい一心から悪い情状をふせ真偽を交えて供述したため」と強弁し、石川氏をうそつきだとデッチ上げ、警察のデッチ上げ工作の責任を全て石川氏になすりつける極悪非道なるベテンをおこなっているのである。

その第三は、井波の強権的訴訟指揮によつてもなし得なかつた事実審理の打ち切り、あるいは井波によつても採用された証拠をも採用を取り消し、「石川有罪」をデッチ上げたことである。

寺尾は、強権的なる井波の失敗に対し、当初ハト派的ポーズをとつて戦列の武装解除をはかりつつも、再開公判闘争の大爆発に恐怖

し、機動隊を大量配備し、日共・カクマルをかかえこみながら、三・二二暴挙にうって出たのである。

すなわち、石川氏無実の証人・証拠を全て却下し、井波さえ採用した上田鑑定人の証人の採用をとり消し、二月公判で決定した「現場検証」をもとり消し、五・二三公判において、まだ全く調べてもいないのに「調べるべきものは調べつくした」と審理の打ち切りを理不尽にも強行し、石川氏十二年の無実の血叫びを踏みにじり、一審内田「死刑」差別判決、二審井波のメチャクチャな「事実審理」にのみ依拠し、暴虐さあまりない差別有罪判決を下したのである。

その第四は、その判決文において、部落問題を抹消し、「差別用語」を使わぬことによつて、差別を貫き、差別を深めた、「石川有罪」をデッチ上げたことである。

寺尾は三・二二公判において、「部落問題に理解がある」とばかり書籍名をあげ、「そういうものを読んでおります。両席裁判官においても程度の差こそあれ、かなりの分量のものを読んでおられます」と言辞を弄し、狭山差別裁判は無実の部落青年石川氏を「犯人」にデッチ上げた権力の差別犯罪であるという弁護側の主張に耳をかたむけているかのようなポーズをとりながら、しかし部落大衆・労働者人民をあざむいて判決文には部落差別を意識的に抹殺し、「差別用語」を用心深く隠ぺいし、一審内田判決を全面的に追認するコウカツなる差別犯罪をおかしているのである。

その第五に、こうして寺尾「無期懲役判決」が一審以上に差別的、反革命的、階級的なものであることが浮き彫りにされる。

差別・無実、糾弾・奪還の全人民的政治闘争として爆発した狭山闘争は、「裁かれるべきは国家権力であり、裁くべきは石川青年をはじめとする全国三百万部落大衆である」とを刻印した。ここに日帝の恐怖の本質、支配の危機が存在するのであり、だからこそぎりぎりのところまで追いつめられた日帝「寺尾」は、「石川無実は百も承知」だが、これを認めたら人民の糾弾の嵐にさらされ、アジア侵略革命に向けた国民統合は破産し、革命の危機に瀕する。何としても『全面有罪』でなければならぬ。しかし『全面有罪』でゆく場合も、ちよつとマヌーバーを使つてだまされなければだめだ。『無期懲役』がいい。これなら最高裁でも『書面審理—上告棄却』の線にいける」と、ブルジョア国家権力の階級の本能、腹黒い胸算用で「無期懲役判決」に打つて出たのである。

だから、かかる寺尾「無期懲役判決」は、無実の部落青年石川氏を「殺人犯」にデッチ上げ、「死刑」を宣告して十二年にわたり獄中にとじこめてきた、その石川氏の痛苦と闘魂、そして部落差別の中から決起した三百万部落大衆・労働者人民の雄たけびに対する回答として下されているが故に、実質的な「死刑」判決そのものである。寺尾の新たな差別犯罪、未曾有の差別犯罪とは、このようなものなのである。

寺尾判決は、井波打倒、再開公判闘争の爆発、九月決戦の死闘に追いつめられた日帝の反動的まき返しであり、日帝の朝鮮—アジア侵略革命と、国内侵略反革命体制構築の環、差別分断支配のために部落大衆・労働者人民にかけられた攻撃である。

日帝百年の侵略の歴史の中で、差別主義・権威主義・排外主義に屈服し、アジア人民をじゅうりんしてきた、日本労働者階級人民の歴史的階級的弱点をつく、狭山差別裁判「寺尾判決」に対し、日本労働者階級人民は、血債をかけた反撃を加えなければならぬ。寺尾判決の差別的・階級の本質を徹底暴露し、人民の巨大な決起・爆発をもつて十・三一体制を粉砕せよ！

3 十・三一体制の「左」足、日共の狭山闘争への敵対を許すな！

狭山闘争の歴史的勝利と上告審闘争を闘い抜くわれわれは、日共の狭山闘争に対する敵対を決して見のがすことができない。

日共は寺尾体制の下で、①権力の差別犯罪を一切黙殺し、「えん罪」事件として闘争をゆがめ、②寺尾裁判長は「よく部落問題を勉強している」と寺尾を不当にも美化し、③「白の心証」をふりまいて狭山闘争の武装解除に容与し、寺尾体制をささえてきた。

狭山九月決戦は、一方で差別・無実、糾弾・奪還の下に二十万部落大衆・労働者人民を決起せしめ、その路線の正しさを全人民の前に明らかにした。

他方、法廷内闘争路線、「えん罪」路線の日共「守る会」は決定的に孤立し、寺尾判決によつて決定的に破産してしまつた。すなわち寺尾「無期懲役」判決は、「白の心証」をくつがえし、「寺尾いゝ裁判長」をくつがえしたのである。かかる日共の狭山闘争路線の破産は、その根底にある合法主義・ブルジョア民主主義に立脚し、「中間層」に最大公約数的結果をなす、実質的な排外主義・差別主義的なる人民動員、かかる内実の下での「民主連合政府構想」、社共統一戦線をも全面的な破産の極にたき込んだ。

これに危機感と恐怖を深めた日共は、狭山闘争と決定的に対決するに到つた。今年初頭、「赤旗一・一一」紙上に「一般「刑事事件」と民主的支援運動」論文を発表した。彼らは狭山事件は「えん罪」でさえないと、寺尾「有罪判決」を支持し、狭山闘争と決定的敵対を宣言したのである。日共はこれを前後して、「八鹿高校暴力事件」をデッチ上げ、全国的に差別キャンペーンをくり広げ、差別映画「橋のない川」の連続上映を画策し、「正常化連」結成を各地で画策して反動的反革命的まき返しをなさんとしてきた。

又、上告審闘争への破壊策動の激化も必至である。日共の反革命的敵対、十・三一体制の「左」足・日共の狭山闘争・部落解放闘争破壊策動を粉砕し、部落大衆と労働者人民の共同闘争を防衛することも又、部落解放闘争・狭山闘争の歴史的勝利を克ちとる上には、不可欠の任務である。

4 十・三一狭山上告審闘争への全人民的決起を克ち取り、最高裁村上—吉田体制の「書面審理—上告棄却」策動を粉砕せよ！

上告審闘争は既に開始されている。十・三

一寺尾差別判決に、「そんなことは聞きたくない」と燃え上る怒りの糾弾を投げつけた石川氏は、即日上告手続きをなした。二月八日、日共系弁護士は逃亡にもかかわらず二百名をこえる大弁護団が結成され、上告趣意書の作成が、今全力で進められている。他方最高裁第二小法廷が狭山裁判を担当することが決まり、上告趣意書の提出期限は来年一月十八日に確定した。

最高裁は、前長官反動石田の時代に全面的に再編され、反動裁判官でかためられている。裁判長吉田は、石田の直系である。そして何よりも忘れてはならないのは、三月「狭山早期結審」直々命令を下したのが他ならぬ、最高裁村上体制なのである。最高裁村上—吉田体制は、「石川有罪」派でかためられているのである。

われわれの、寺尾差別判決への怒りと闘いのすべてはこの村上—吉田体制にたきつけられねばならない。寺尾差別判決が、日帝の体制危機の延命と、狭山闘争の全人民的の高揚を破壊せんとする、瀬戸際のお返り、大暴虐であることからして、更なる日帝の中核、最高裁村上—吉田体制が、ただ「石川有罪」のみ目的とする超反動体制であることを見るとき、そして今、村上—吉田体制による「密室書面審理—上告棄却—石川有罪」策動を巡らしているのを見てとるとき、にもかかわらず、われわれの闘いが決定的に立ち遅れていることを卒直に認め、狭山闘争の歴史的勝利に向け敢然と決起しなければならぬ。最高裁は、弁護団の証拠開示請求に対し、「最高裁は事実審理をするところではないので一切応じない」と拒否し、最高裁と共謀して弁護団の「事実審理—口頭弁論」要求を踏みこじらんとしている。寺尾差別判決体制の「左」足、日共は、一・一一赤旗論文をもつて狭山闘争への敵対を宣言した今日、上告審闘争に対しても、闘争破壊策動を深めてくることは必至である。

又他方で最高裁が上告趣意書提出期限を認めたことで「最高裁は事実審理を行う」という幻想をふりまいたり、「最高裁では勝てない」という敗北主義的傾向とはつきりと対決し、日共の敵対を打ち砕き、不屈に闘い抜いている石川氏と共に、とことん最高裁村上—吉田体制粉砕に向け奮闘しなければならぬ。最高裁村上が最もおそれるのは、高裁寺尾をゆるがした部落大衆・労働者人民の全人民的決起であり、寺尾「無期懲役判決」に心の底からの怒りをもつて実力決起する巨万の部落大衆・労働者人民の影である。だからこそ最高裁村上は、部落大衆・労働者人民が、まだ立ちあがる前にこつそりと「密室—書面審理」をやつて、「上告棄却—石川有罪」を策動しているのである。

全ての労働者人民諸君、部落解放同盟は既に、あの大暴虐からかぞえそ一年目、今秋十・三一に寺尾差別判決抗議総決起集会を決定している。十月三十一日、最高裁に総決起し、狭山上告審闘争の未曾有の大爆発を克ちとれ！

最高裁村上は、寺尾以上の階級的全体重をかけて、上告審闘争にのぞんでいることを、この間の階級情勢の中からはつきりと知るのでなければならぬ。朝鮮を巡る危機が、日帝の命運を決するものとして存在し、従つて戦後帝国主義の存亡をかけるものとして存在

する重み故に、三木訪米による安保の朝鮮侵略反革命戦争体制への再編、日「韓」体制の戦争遂行体制としての再編をいそぎ、日「韓」閣僚会議を開催し、かかる体制を日本労働者階級人民におしつけ、アジア人民に侵略反革命を強要する天皇訪米を画策している。かかる飛躍的な侵略反革命へのめり込みと侵略反革命体制構築の攻撃は、必然的に日本人民の歴史的弱点たる日帝の伝統的なる差別主義、権威主義、排外主義的人民統合を不可欠のものとして深めるのである。

日帝の侵略反革命に対する闘いとしつかり結合して闘い抜くことなくして最高裁判上体制と有効に対決し得ないのも真理である。

日「韓」閣僚会議粉碎、天皇訪米絶対阻止を総力で闘い、この闘いと固く結合して、三一寺尾差別判決抗議集会への組織化を貫徹せよ！

当面の闘争日程

- 8・28 シュレジンジャー来日阻止闘争
六時 桜町公園
- 9・13-14 日「韓」閣僚会議粉碎、安保1日
「韓」体制打倒闘争
13日 六時芝公園
主催 三労活
- 14日 日「韓」閣僚会議粉碎羽田
現地闘争
正午 東蒲田公園(予定)
主催 現地共闘
- 9・30 天皇訪米阻止羽田現地闘争
蒲田一丁目公園(予定)
主催 現地共闘

当面のスローガン

- ★日帝の朝鮮出兵に向けた全島軍事基地化攻撃！海洋博粉碎！
- ★日帝！朴による金芝河虐殺阻止！
- ★朝鮮侵略反革命戦争への道！
- 日「韓」閣僚会議粉碎！
- ★三木戦争準備内閣打倒！
- ★アジア最後の反革命生命線
- 安保！日「韓」体制打倒へ向け
- 天皇訪米絶対阻止！

過渡期世界の革命

第三次ブントへの軌跡

日向 翔 著

戦旗社

定価二二〇〇円 送料一一〇円